箱の中の住人

久生夕貴

sideA：Ｉ-1

　三津屋紀子は苛立っていた。

　耳障りな音が今日も彼女の神経を逆なでする。
　これで何度目だろう。

　ーーー体どんな育ちをしているんだか。

　腹立ちまぎれにテレビのリモコンに手を伸ばした瞬間、再び「ドスン」と言う音と共に微かな振動が彼女を襲う。
たまらずリモコンを床に叩きつける。

「うるさいのよ！」

　軽くヒステリックに叫ぶと、紀子は携帯を手に取り、送信記録から目当ての番号を探し出す。

　ーーもう我慢ならない。どれだけ私が耐えてきたと思っているのか。

　新参者だと思って、しばらくは我慢してきた。
　けれど上階の住人が出す騒音にはもう限界だ。

　ーー今度こそ追い出してやる。

　そう息巻いて通話ボタンを押す。数コール後に相手が出る音がする。
　紀子は息を整えながら、努めて冷静に声を出す。

「ベルリッツマンション２０５号室の三津屋ですが」

　相手の反応を聞き終わらないうちに、紀子は一気にまくし立てる。

「もういい加減にして欲しいんです。私たちがどれだけ耐えてきているか、わかっているんですか」

　返ってくる言葉は相変わらずおざなりな言葉ばかりだ。
　馬鹿にしている。
　いつもそうやって上手くかわされるのだ。

「何度その言葉を言えば気が済むんですか。本当に私の言っていること理解してるんですか？」

　相手は何も言わない。

「私はこの３ヶ月まともに夜も寝られない生活が続いているんです。本当にこのままではノイローゼになってしまいます」

　怒りで紀子の脂肪の薄い頬がひくひくと痙攣する。
　この数ヶ月で５キロも痩せてしまった。

「私たちはただ、静かに生活したいだけなんです。それをわかっていただきたいだけなんです」

　わかって欲しい。
　いや、わからない方が、おかしい。
　何度も言葉を重ね、相手の反応にいらつき、そんなやりとりを数十分繰り返す。

　突然インターホンの呼び出し音が響いた。

　紀子は一瞬ビクッとなる。
　一体誰だろう？
　通話口の相手に言いたいことはまだまだある。

　このまま話し続けるかどうか迷ったが、突然の訪問者をそのままにしておくのも気になる。
　紀子は心の中で舌打ちをすると、通話相手に一旦切ることを告げる。
　その間にもう一度呼び出し音が鳴り響き、苛立ちまぎれに持っていた携帯をソファの上に投げ置くと、インターホンの通話ボタンを押す。
　画面に写った人物は、どうやら宅配業者のようだ。

「田川急便です。お荷物お届けに参りました」

　紀子は「ちょっと待ってください」と言うと、引き出しからハンコを取り出し玄関へと向かった。
　宅配業者から渡された荷物は、冷凍物を扱うクール便だった。
　発泡スチロールで出来た箱で、大きさはビジネスバッグがすっぽり入るくらいだった。

「一体何なの……」

sideA：Ｉ-2

　何か注文した覚えは無い。

　送り主の住所を見てみるが、まるで心当たりが無かった。
　送り状の商品名には「生もの」とだけ書かれてある。
　訝しく思ったのだが、また夫が隠れてカニだか肉だかを買ったのだろう。
　帰ってきたら文句の一つでも言ってやろうと思い、箱をテーブルの上に置いて開け始めた。

　発泡スチロール箱の中には更に何重ものビニール袋に入れられた上に、粘着テープでしっかりと梱包されたものが入っている。
　透明度が低い袋のため、中の物がよく見えない。
　紀子は袋ごと箱から取り出し、しげしげと眺めてみる。
　やはり外からは中の様子がよくわからない。
　凍っているようでかちかちに固まっているものがいくつか入っているようだ。苦労して粘着テープを剥がし終えると、袋の口を開く。
　中には霜をかぶった黒いものが見えた。

　ーー何、これ。

　紀子は中の物にそっと手を触れてみる。
　ざらりとした手触り。
　そして顔を近づけ物体の正体を認識すると同時に、「ぎゃっ」と声を上げた。

　黒っぽく見えたものの正体は、切り取られた猫の首だった。
　うつろに開いたままの濁った瞳と、目が合ったのだ。
　所々どす黒い血がこびりついている。
　箱の大きさから察するに、他の部位も入れられているのだろう。

　紀子はがくがくと震えながらも、何とか箱から離れようとするのだが、腰が抜けて上手く動けない。
　ふらついた拍子に手があたり、猫の死骸が箱ごと床に落ちる。
　猫の頭が、床の上に転がる。
　再び、悲鳴。

　ーー誰が、誰がこんなことを。

紀子はパニック寸前の頭で考える。
猫のばらばら死体を送りつけるなんて狂ってる。

ーーあいつだ。上階の住人に違いない。

こんなことをするのは、他に考えられなかった。
今までだって何度も嫌がらせをされてきたのだから。
そう思い立った途端、紀子の頭は怒りと屈辱で沸騰しそうだった。顔がかーっと熱くなり、呼吸が荒くなるのがわかる。

ーーあり得ない、あり得ない、あり得ない！

紀子は激しく首を振る。
怒りで唇がわななくのがわかる。
自分が人に迷惑をかけておいてよくこんな酷い嫌がらせをできるもんだ。
いつだっていつだっていつだって正しい人間が損をする。
こんな事があっていいはずがない！
紀子は床に拳を打ち付ける。身体が小刻みに震えていた。

ーー許せない。

許せない許せない許せない。
こんなこと許していい訳がない。
絶対に謝罪させてやる謝罪させてやる！
慰謝料までもらわなければ気が済まない。
自分がいかに間違ったことをしているのか、思い知らせてやる。

紀子は徹底的に戦う決意を決めていた。
先程の恐怖心は、一瞬で消え去ってしまっていた。

sideB：Ｉ-1

　宮下知恵は携帯を閉じると、ため息をついた。

「どうした？」

　隣で様子を見守っていた俊彦が声をかける。

「三津屋さん。もういい加減にしてほしいってさ」

「あのおばさんもしつこいな。お前も話を聞いてやるから図に乗るんだよ」
　俊彦が呆れ顔で言う。

「だって……仕方無いじゃない。悪いのはうちなんだし」
「だからって、あんなに何度もかけてこられたら、こっちこそ迷惑だろ。お前だって携帯鳴るたびに、びくびくしてるし」

　俊彦が言うのも無理なかった。
　最近の知恵は電話恐怖症と言えるほど、電話がかかってくることに怯えているからだ。

「大丈夫だよ。それなりに対処してるし」

「本当に大丈夫なのか？　お前こそノイローゼになってるみたいで、俺は見てられないよ」

　知恵は小振りな団子っ鼻をすん、と鳴らすと笑みを浮かべて、

「心配かけてごめん」

　とだけ言って、席を立った。
　後ろで心配そうに知恵を見つめる俊彦の視線を感じる。

　ーーこれで、いい。

　知恵はほくそ笑む。
　自分はこれくらい弱い立場でいなくてはならないのだ。
　そうでなければ、自分が犯人だと疑われるに違いない。

――これで、あの女に一泡吹かせてやれる。

三津屋紀子。
あの頭のおかしい女のおかげで、どれだけ知恵が心を痛めたことか。

最初の頃、知恵は素直に自分の非を認めていた。
かかってくる電話の度に、謝ったものだ。
そして、何度も何度もかかってくる電話で浴びせられる罵声を聞くうちに、知恵の感覚はどんどんと麻痺していったのだ。

自分が悪い、自分が悪い、自分が悪い。

周りからどれだけ三津屋紀子がおかしいと言われても、自分が悪いとしか思えなくなっていた。
「悪いのは私」と言う強迫観念に取り憑かれてしまったのだ。
電話がかかってくる度に怯え、人と会話をするのが辛くなっていった。

そこから抜け出すのに一ヶ月以上を要した。
その間にも三津屋からの電話はひっきりなしにかかってきていたのだが、何とか耐えた。
よく耐えきったものだと、今でも思う。

どうにかして強迫観念から抜け出すと、今度は三津屋に対する憎しみが地底のマグマのごとく、一気に噴出して来た。
自分をここまで追い込んだ三津屋が憎くて憎くて、堪らなかった。

sideB：Ｉ-2

ーー自分がこんなに人を憎むようになるなんて。

知恵は今までこれほどに人を憎いと感じたことなど無かった。
そして、自分をそうさせた三津屋紀子を許せなかった。

ーー痛い目をみせてやりたい。

ああいう人間は自分の言葉がどれだけ人を追い込み、迷惑をかけているのかわかっていない。
自分が全て正しいと思いこみ、正当性を盾に何を言っても許されると思っているのだ。
少しくらい痛い目を見せなければ、自分の受けた苦しみが報われない。

どうやったらショックを与えられるか、知恵は考えに考えた。
中途半端な嫌がらせなどするつもりは無かった。
一度きりで、出来る限りのショックを与えられる方法を考えた。

そうだ、死体を送りつけてやろう。

こんなことを平気で思いつく自分は、もう狂っているのかもしれない。
知恵はそう感じながらも、誰にも悟られないように事を起こした。

動物の死骸などそうそう手に入るものでもない。
どこから調達するか、知恵は考えた。
しかしどう考えても、死体の入手先など浮かばなかった。

仕方がないので、自分で作ることにした。
近所の野良猫を捕まえようと思ったのだが、思った以上に警戒心が強くなかなか捕まらない。
知恵は簡単に猫を手に入れる方法を探した。

そうだ、もらってこればいいのだ。

しかし顔見知りにもらうわけにはいかない。
リスクを考えれば、出来るだけ金輪際会う可能性のない人物からもらいたかった。
知恵はインターネットの里親募集サイトから、適当な猫を選んでもらうことにした。
何件かに問い合わせをし、あまり自分のことを聞いてこない警戒心の薄そうな人物からもらった。

しばらく飼ってしまえば、情が移ってしまう。
知恵はもらったその日に、猫を殺した。

可哀想だとは思ったが、復讐のためには仕方がないと自分に言い聞かせた。
まだ子猫だったので、首の骨を折れば簡単に事切れた。
そしてホームセンターで買ってきたのこぎりでばらばらにし、冷凍庫で凍らせた。

――今頃どんな恐ろしい思いをしていることか。

恐怖に震える紀子を思い浮かべると、知恵は愉快で堪らなかった。

sideA：Ⅱ-1

三津屋紀子は３０５号室のドアの前に立っていた。

手には猫の死体が入った箱を抱えている。
あの後紀子はすぐに警察に電話をしようとした。
しかしよく考えてみると、この死体の送り主を証明するものが何もないことに気がついた。
こんな状態では、どうせ適当にあしらわれるのが関の山だ。
警察と言うものは、証拠がなければまともに動いてくれやしないのだ。

――そうよ、返してやればいいのよ。

同じ目に遭わせてやればいいのだ、と紀子は考えた。
自分への送り状を剥がし、死体を元通り箱に詰めた。
これで誰が置いたのか証明する物は何もない。
念には念を入れ、指紋も全て拭き取っておいた。

――部屋の前に置いてきてやる。

紀子は箱をドアの前に置くと、そのまま立ち去った。
まさか自分が送りつけた物が戻ってくるとは考えまい。
それ以前に、人に迷惑をかけて何とも思わないような人間は、紀子が犯人の正体に気がつくことすらわかっていないに違いない。
だからこんな馬鹿げたことができるのだ。

そう考えると、紀子は愉快で堪らなかった。
箱を見て憤慨するテングザルのようなあの女の顔が浮かんだ。

――さあ、どう出るのかしら。

お前が犯人だろう、と言ってこようものなら、死体を送りつけた犯人が自分だと認めるようなものだ。
そうなれば訴えてやればいい。
何も言ってこなければ、私の勝ちだ。

紀子は半ば興奮した面持ちで、自室の玄関の扉を開けた。

sideB：Ⅱ-1

宮下知恵は落ち着かなかった。

そろそろ三津屋紀子の家にあの死体が届いているはずだ。
あの女の生活パターンは知り尽くしているため、確実に家にいる日時を指定して送ったのだ。

あの女はどんな反応を示したのだろう？　まさか私が犯人だとは思うまい。
様々な想像が知恵の中を駆けめぐるたび、興奮する精神を押さえるのに苦労した。

「どうかしたのか？」

俊彦が訝しそうな表情で知恵を見る。

「なんだか顔が青いぞ。気分でも悪いのか」
「ううん、何でもないよ。ちょっと疲れているだけだと思う」
「大丈夫なのか。ここのところ根詰めすぎだろう。無理すんなよ」

俊彦は心底心配そうな目をしている。知恵は心が痛んだ。
俊彦は本当に優しい男だ。

「ごめんね、いつも心配ばかりかけて」

全てはあの女が悪いのに。
俊彦にまでこんな思いをさせる三津屋を、知恵はますます許せないと感じた。

「なあ、気晴らしにメシでも食いに行かないか」
「え……ごはん？」
「たまには奮発してイタメシでも行こうぜ。お前好きだろ？」

知恵はイタメシの気分にはなれなかったのだが、黙って俊彦の提案を受け入れることにした。
変に断って、また心配をかけてはいけない。

知恵は出かける準備をすると、玄関のドアを開けた――。

sideA：Ⅲ-1

三津屋紀子は戦慄していた。

ーーなんで？　どうして？

部屋に戻って３０分もしないうちに、紀子の家のインターホンが鳴り響いた。
ひょっとして上の住人が？　と思った紀子が意気込んで出ると、なんと相手は警察だった。

「三津屋さんですね」
「は、はい」
「〇〇署の高橋と言いますが、ちょっとよろしいでしょうかね」
「い……一体何なんですか」

モニターを見つめる紀子の額に汗がにじむ。

「それはご自分でわかっているでしょう」

高橋は有無を言わさない声音だった。
まさかあの女、警察に通報したのか。

ーー信じられない。

正気か？　と紀子は思った。あの女、本当に気が狂っている。
でも、と紀子は思い直した。

ーー良い機会だ。これを機に、あの女の犯行も明らかにしてやる。

本当に馬鹿な女だ。
自分で自分の首を絞めているのがわかっていない。
それともばれないとでも思っているのか。

絶対に暴いてやる。
ちゃんと話せばわかってくれるはずだ。
今までだって、自分は被害者だったのだから。

紀子は覚悟を決め、玄関の扉を開いた。

sideA：Ⅲ-2

「こんばんは、三津屋紀子さんですね」
「はい」

　高橋の厳しい表情に負けまいと、紀子は冷静なふりを装った。

「何故、私が来たかわかりますか」
「……猫の死体のことでしょ」

　高橋は黙って頷くと、厳しい表情を崩さずに続けた。

「何故、あんなことしたんですか」
「待ってください、そもそも私は被害者なんです」
「被害者？」

　高橋は訝しそうに眉を動かす。紀子は大きく頷くと、

「あの死体は、元々私に送りつけられてきたものなんです」
「でも、被害者の方は知らないと言っていますよ」
「そりゃ、自分が犯人だなんて言わないでしょう。それを調べるのがおたくの仕事なんじゃないんですか」

　高橋はしばらくの間沈黙した。

「大体、私はこれまでもずっと耐えてきたんです」

　紀子はここぞとばかりに、まくしたてる。

「毎日のように続く騒音に、数々の嫌がらせ。その上にこんなものまで送られてきて……。
　私の方こそ被害者なんですよ」
「……嫌がらせ、ですか」
「そうです。私がベランダにいるときに限って、布団たたきをはじめたり、
　私がいる部屋いる部屋を追いかけるように足音を響かせたり」

　紀子は必死に続ける。

「この間なんて、私がスーパーに買い物に行っていたら、あの人もいたんですよ。
　私、ストーカーされているのかと思った」

　紀子がまくし立てれば立てるほど、高橋の顔が呆れた表情に変わっていくのがわかった。

「聞いてるんですか？　あなたも同じ目に遭ってみればわかります。
　どれだけ私が辛い思いをしてきたのかが」
「……わかりました。詳しい話は後でゆっくり聞きますから、一度署の方まで来ていただきましょうか」

　それを聞いた紀子は激昂した。

「何で、私が連れて行かれなければならないのよ！　悪いのは全部あの女でしょ！」

　高橋は冷めた視線を紀子に向ける。

「わかったから、早く来なさい」
「何でよ！　何で誰もわかってくれないのよ！」

　紀子は叫んだ。

「悪いのは３０５号室の坂田洋子でしょお！！」

sideB：Ⅲ-1

　宮下知恵が扉を開けると、そこには女が立っていた。

「……こんばんは、突然すみません」

　突然扉が開いたことに驚いたのか、女は少し引きつった表情で言った。
　女の顔はどこかで見たことがあった。
　誰だろう？　知恵は考える。
　つい最近見た顔だ。

　ーーお客さん？

　一瞬そう考えたが、客が自分の家を知っているわけがない。
　知恵は頭をフル稼働させて思い出そうとした。

　不動産会社に勤める知恵は、毎日何人ものお客と接している。
　最近は酷いクレーマー客のおかげで、人と話すのも嫌になってはいるのだが。
　故に一度だけ見た人間が多すぎて、思い出すのに時間がかかってしまった。
　自分の住所を最近教えた人間とは……。

「あ」

　知恵は思い出した。
　思い出して、戦慄した。

「猫をくださった……方ですよね」

　女は黙って頷くと、知恵に向かってゆっくりと言葉を発した。

「猫、元気ですか？」
「猫？」

　後ろでやりとりを見守っていた俊彦が訝しそうに知恵を見る。

「猫ってどういうことだ？　知恵」

「……」

知恵は咄嗟に言葉が出ずに、沈黙した。
自分が犯した罪にようやく気づき始め、がくがくと足が震え出す。

「私、心配になって様子を見に来たんです。猫に会わせてもらえますか」

女は真剣な目で知恵を見つめる。
その目はすがっているようにも見えた。

「猫は……いません」

知恵は、それだけ言うのが、精一杯だった。

sideB：Ⅲ-2

「何故、いないのですか」

　女は表情を一変させ、知恵に詰め寄る。

「何でいないの？　どこにやったの！」
「お、おい……」

　俊彦が慌てて間に入る。

「どういう事なんだ、知恵。猫って何だよ！」
「実験業者に売ったの？」

　女は今にも飛びかかりそうな表情で知恵を睨む。
　知恵はぶるぶると頭を振る。

「じゃあ、どこにやったんですか」
「……死にました」

　それだけ言うのが、やっとだった。

「死んだって……どういうことですか」

　女の目に涙が溢れる。

「健康だったはずです。ちゃんと飼っていれば死ぬはずなどないでしょう！」
「すみません……」

　知恵は突然土下座をした。
　俊彦が驚いて、後ずさる。

「すみません、すみません……」
「すみませんじゃなくて、どうしたかと聞いているのよ！」
「私が……殺しました」

　女の目が見開かれる。

「そんな……何で、何でなのよ！」

　女は泣きながら叫んだ。

「怪しいと思ったのよ……渡した後に連絡は途絶えるし。今流行の里親詐欺じゃないかって……！」
「ごめんなさい、ごめんなさい……」

　知恵は泣きながら繰り返した。
　女は知恵に冷たい視線を向けて、言い放つ。

「ごめんですむなら警察なんていりません。私はあなたを、訴えます」

outside : 1

「……結局、どういうことだったんですか」

　ベルリッツマンション３０５号室の住人、坂田洋子が高橋に尋ねる。

「三津屋紀子の勘違いだった、と言うことです。最終的には」

　高橋は半ば呆れた声音で言葉を発する。

「でもあの猫の死体は三津屋さん宅に送られてきたものだったのでしょう？」
「ええ、宅配業者に確認したら、彼女の言うとおりでした」
「じゃあ、あの死体は一体誰が……」
「不動産会社の人間だったみたいです」
「不動産会社？」

　洋子は怪訝な表情で訊く。

「三津屋紀子は何か不満がある度に、管理会社の不動産業者にクレームを入れていたそうなんです。
彼女の担当者の女性社員がいつも対応していたんだとか」
「ああ、そう言えばうちにも何度かかかってきてましたね。確か……宮下さんだったかしら」

「そうです。宮下知恵は三津屋紀子から何度も何度もかかってくるクレームに、頭を悩ませていた。
　内容は取るに足らないことばかりなのにも関わらず、
　三津屋紀子はとにかく自分が被害者だと言うことを宮下知恵に訴えていたそうです」

「私たちの足音がうるさいとか……そう言う話は聞いたことがあります」

「宮下が言うには、あなた方が出す物音など生活の範囲内で仕方のないものだった、と。
　一度どれだけうるさいか聞きに来いと言われ、
　実際に三津屋紀子の家に行ったことがあるんだそうですよ」

　洋子はとまどい気味に頷くと、ため息をついた。

「三津屋さんが私をよく思っていないのは薄々、わかっていました。
　最初は挨拶しても無視をされる程度だったんですが、
　だんだん私の行動を監視するようになってきて……。
　あんまり気味が悪いんで主人に頼んで、玄関に監視カメラを設置してもらったんです」

「それで今回の犯行が発覚したわけですね」
「皮肉な話です」

　そう言って洋子は苦い笑みを浮かべた。

「今回の被害者は、何の罪もない子猫だったのですよね」

　洋子が暗い表情で呟く。

「そうですね。あの猫は本当に気の毒だったと思います」
「私、動物が好きですから……本当にいたたまれません」
「私もです」

　高橋も静かにうなずく。

「でも私、宮下さんをここまで追い込むことになったこと自体が、本当に恐ろしいことだと思いました。
　今回の件、三津屋さんも自分は悪くないと思ってずっと訴えていたわけですよね。
　少なくとも、悪気があった訳じゃない。そしてそれが宮下さんを追い詰めた。
　宮下さんも仕事熱心な人だったんだと思います。だからあそこまで追い詰められてしまった。
　二人とも、ただ一生懸命だっただけなのに」

「いい加減に生きるくらいが、今の世の中ちょうどいいのかもしれませんね」

　高橋は冗談交じりに「いい加減すぎる人間はいけませんけどね」と笑って見せた。

「三津屋さんどうするって言ってました？」
「引っ越すみたいですよ。さすがにあそこは居づらいでしょうから」
「そうでしょうね……」

　洋子は曖昧に、頷いた。

outside : 2

「あれ、また部屋空くんだな」

　ベルリッツマンションの入居者募集看板を見ながら、男が呟く。

「しかもまた２０５号室らしいよ」
「えーまた？　前の人も半年と住んでないだろ」
「でしょ？　なんか怪しくない」
「なんか幽霊でも出るんじゃねえの？」
「えーやだあ」

　そう言って笑い合う男女の隣を坂田洋子は通り過ぎる。

「……今のおばさんの顔見た？」

　男が言う。

「見た見た。あれって火傷の跡なのかな」
「あれだけ目立つのは結構キツイよな」
「そこにしか目がいかないもんね」

　鏡が一枚も無いベルリッツマンション３０５号室で、坂田洋子は一人静かに微笑む。

　ーー次の入居者は、どんな嫌がらせをしてやろうかーー

　それは一日中家にこもることの多い洋子の、唯一の趣味だった。

完